

最優秀賞

もう一度、ソテツの花を見せてあげたい

高岡市民病院 田中 夏美

緩和ケア病棟に勤務していると自宅退院を望む患者に多く出会う。S 状結腸がん終末期である A さんもその 1 人であった。症状コントロールができ次第、在宅復帰することを強く希望していたが、全身状態低下に伴い終日、ベッドの上での生活となった。そのような中、A さんの妻は本人の自宅に帰りたいという思いを尊重し、外出を希望された。A さんの自宅には、家を建てたときに植え、長年夫婦を見守ってきたソテツの木がある。入院中にその木が 3 年ぶりに綺麗な花を咲かせた。その花をもう一度見せてあげたいと妻は感じていた。そんな夫婦の希望を叶えるため、看護師同行のもと数時間の外出を行うことにした。

外出当日は、長男が作成した「お父さん おかえりなさい」という飾りつけと、この日のために県外から駆け付けた長女、仲のいいご近所の方に出迎えられた。玄関先でストレッチャーに寝たままソテツの花を眺めた A さんは、笑顔で拍手をし、自宅に入ると病院では見たことのないほっとした表情をされた。A さんは、病院内よりも言葉数が多く、コミュニケーションを楽しむ姿を見た妻は「こんなに喋っている主人は久しぶり」と涙を流していた。帰院後、A さんは「今日はとても良い日だった。ソテツも綺麗だったなあ。ありがとう」と笑顔で話した。外出後は、以前よりも表情の穏やかな日が続き、ラウンジで開催されるお茶会や花火鑑賞などのイベントに参加され、家族やスタッフとコミュニケーションを取る機会も増えた。

外出から 2 週間後、A さんは家族に見守られながら永眠された。妻は、「外出できて本当に良かった」と涙を流しながら満足そうに話していた。

A さんに出会い、患者や家族の希望を叶えることの難しさを改めて感じたのと同時に、始めから外出困難であると決めつけずに、実現に向けて必要な態勢を整えていくことで可能性は広がり、QOL（生活の質）向上に大きく影響を与えることを学んだ。患者とその家族が今までの人生に何を思い、残された時間に何を大切に、望んでいるのかを捉え、心に寄り添いながら同じ歩幅で歩いて行ける看護師を、目指し続けたい。